

心理学史の中の 女性たち

【第1回】

シャーロット・ビューラー

サトウタツヤ

立命館大学総合心理学部教授。学校法人立命館・学園広報室長。日本心理学会教育研究委員会資料保存小委員会委員長。今回から女性心理学者に焦点を当てた新シリーズが始まります。



時期区分というのは便利なもので、時間の流れにメリハリを与えてくれる。たとえば地球の歴史で言えば氷河期。人間の発達でいえば反抗期。いずれも「期」という語をつけることで、ある時期のことだということを示しているし、氷河期や反抗期は「有る」ものだと思わせてくれる。しかし、これらは「概念」にすぎない。

反抗期という概念を提唱したのがシャーロット・ビューラーである。彼女は裕福な建築家の娘として生まれ、ミュンヘン大学のキュルベの元で心理学を学び博士号を得た(1918)。その2年前にヴェルツブルグ学派として思考や言語の研究をしていたカール・ビューラーと結婚。1928年にウィーン大学で心理学の准教授となる。教授を務める夫・カールと共に心理学研究所を主宰し、その当時はあまり重視されていなかった児童心理・青年心理の分野の研究を行った。彼らの元ではラザースフェルト、ブルンスヴィック、ルネ・スピッツらが研究を共にしただけで



Bühler, Charlotte (1893-1974)
http://america.pink/charlotte-buhler_938365.html

はなく、アメリカからトルマン、ニール・ミラーなども滞在して教えを受けていた。

シャーロットは、詳細な観察に基づいて提案した発達検査(1928)およびその改訂版(1935;ヘッツァーとの共同研究)が関心を集めていた。知能指数(IQ)に範をとり発達指数(DQ)という概念化を行ったのもシャーロットであった。また、日記を用いた分析を行い今でいうライフサイクルに関する先駆的な研究を行っていた。児童期と青年期に現れる親に対する反抗的な時期を反抗期(第一、第二)と名づけたのも彼女であった。そもそも彼女は日記をつけるということが青年に特徴的な行動であることに注目したからこそ日記を素材にして青年の心理について詳細な分析を行ったのであった。『児童期と青年期』(1928)、『若者の心』(1929)、『児童の社会的行動』(1930)などの著書は大きな評価を得ることになった。

だが、ユダヤ人だったシャーロットには時代の暴力が押し寄せる。1938年3月にヒトラーが率いるナチス・ドイツがオーストリアを併合したのである。この時、シャーロットはロンドンに滞在中であったが、オーストリアにいた夫・カールは当局に逮捕されてしまった。カールが釈放された後、夫婦はノルウェーに避難して1年ほど滞在した。そしてカールがミネソタのカレッジに職を得ることができたため1940年にはノルウェーから離れた(ノルウェーが



真ん中がシャーロット、彼女の左手側は夫のカール、右手側はマズロー(1959)
<http://www.apa.org/monitor/2016/02/immigrant-couple.aspx>

ナチス・ドイツに侵攻される数日前のことであった)。

アメリカに移住した夫・カールは年齢が60才だったこともあり、ドイツでの名声を活かすことはできず、逮捕のショックもあってアメリカでは精彩を欠いていたとされる。1945年、ビューラー夫妻はカリフォルニアに移住した。シャーロットは南カリフォルニア大学医学部の准教授のポストを得て、新しい研究に着手した。まず、彼女は集団精神療法に関心をもった。また、マズローやロジャーズと知己を得ることによって、人間性(ヒューマニスティック)心理学の活動にも関心をもった。1962年には『心理療法における価値』を刊行した。

カールが1963年10月に亡くなるとシャーロットはその後10年ほどアメリカで講義や研究に勤しみ、晩年はドイツに移住した。彼女は自伝を残しているが(1972)、それによると、様々な土地で暮らし多くの知己を得たことが人生の喜びであったとのことである。シャーロットは1974年2月に亡くなった。